



毎月一回十五日發行(定價一部五錢一年郵稅共五十錢)

編輯 須野長 發行所 野上野市南町
印刷所 野上野市南町
社務部 野上野市南町

茶話(伯林より日本迄)

續

佐藤春太郎

極端から極端に走る處物價のいやが上にも高い紐育は結局我々の長居の地ではないと思ふたが、コロンビヤ大學でウイルソン教授に會つた事は何よりよい印象であつた。晩にはうちの晩餐に來いフラウも喜ぶだらう」とまるで我兒を迎へる様な老教授の松葉杖ついた慈顔が今も余の眼底に残つて居る。一日市外ロングアイランドのカーネギー實驗進化學研究所を訪問した事も余にはよい印象であつた。遂手間取つて發車の時間が迫り、同所のブレイクス氏が、幾から自家用自動車を出し、フルスビードで驛まで送つて下さつた事も思出である。此處の所長であり優生學者として有名なダーベンポート氏の斡旋で、紐育で開催中の優生學會に出席して總裁チャンベル氏に會つた事も喜ばしい事であつた。紐育の炎熱に辟易した余等は郊外の海水浴場コーネアランドでわづかに半日の閑を取り、ケンシルバナヤ驛を夜出發した。車中で一泊し、翌朝ナイヤ

ガラの涼氣に下り立つた時は、オーパーがほしい位であつた。自動車を雇ひ、アツパー橋を渡ると、(橋の途中で國境監視人が旅券をしらべる)カナダ側に入るのであるが、此處からはアメリカカ瀑とカナダ瀑との両方が同時に見られる。一分間千五百萬立方呎の落下水量は、轟々天地を掃ぶり飛沫は擴つて霧をなし二重の虹を脚下に踏む有様は全く天下の偉觀である。瀧壺での最深淵ホワーブルの眞上を綱渡りした事や、地下千何百呎を下つて瀑の裏見をした事やいづれも旅の一興であつた。有名なナイヤガラ發電所も參觀した。アメリカ横斷の途中山中の都ソートレイキは其持つ由來と共にまことに美しい物語りの様な處であつた。ロッキーマウンテンの風光を愛で一滴の水が遠く大西と大平の兩洋に分れるアメリカの大屋根をも過ぎ、シカゴでは例の世界最大の屠殺場で顔をもむけ。ミシガン湖畔リンコルンの像では其遺徳を偲び、南に下つてロスア

ンゼルスに着いたのは六日目の朝であつた。我日本人に最も縁の深いロスアンゼルスは、盛澤山な見學は、此地だけでも一くさり話の種になりそうである。例へばオリンピック會場養蠶場、養獅子場、スプリングヒルの大油田地、風光明媚なパサデナの富豪別荘地、山城御殿、夜の菓物市場、すつとくだけはハリウッド撮影場、おなじみのチャップリンやダグラス、メリーの敷奇を凝らした邸宅、少し隔つてはロングビーチの海水浴場、ウイルソン天文台、パサテナ生物研究所等敷へ上れば限りもないが、茲に一寸書き加へて置きたい事は、日本人赤松氏の蠶室を訪ねた事であつた。棒ばかりになつた桑の鉢植を裏口に見出して漸くそれと目星つけた程さややかな住みであつて、従つて氏の飼育苦心談も容易ならぬものであつたが、不撓不屈目下メキシコ政府から交渉があり、數年後にはそこで經營すると云うて居つた。其族からむしり取つて贈られた日支黃繭は今余の手元にある。羅府在住の日本人は三萬を越えたと云はれ、其日本人街には、壽司屋あり、うどん屋あり、本屋にはあらゆる日本の雑誌が並べられ、餅菓子も自由に求められるし、日本語で用も足るので

山本三郎著 化學純絹の工業的完成 ¥0.30
 蠶絲科學研究會編 伊太利蠶絲編 現況の衰退原因と其業 ¥1.50
 菅原治著 蠶絲業法規要論 ¥2.30
 市田上縣野長 會究研學科絲蠶 所行發 (振替長野6413番)

現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機

1933年代表型

製作發賣元 株式會社 大和三光商會
 東京京橋區京橋三丁目二番地 電話京橋(56)五三二〇番

營業課目
 特許大和式自動輸送乾燥機
 特許帶川三光式乾燥裝置
 特許願やま電ホイロ機
 特許大和式熱湯自動還元機
 特許水野式改良ロストル
 特許アイエム・コールセダー
 特許アイエム・ストーカー

半ば日本に歸つた様な氣がした。羅府を出て北に十五時間途中の異つた風景を眺めつゝ、汽車は桑港に着いた。こゝもよい處ではあるが、見物に厭き氣味の余にはもはや何をしても大きくも美しくも感じなくなつた。只一つ金門公園内、嘗て博覽會の遺物である純日本式庭園に憩ひその亭で黒襦子の帯しめた日本のお婆さんの御給仕で、漉茶と煎餅を喫したのは珍しかつたし、支那人街の壁と云はず屏と云はず抗日のビラがベタ／＼貼られてあるのも變つて居た。余等の乗る春洋丸、小さいながらサーピスは世界一と云はれる日本の船は、こゝから西に向けて出帆したのである。嶋影見えぬ爲洋上の生活七日目、船は布哇ホル、に寄港した。沙漠のオアシスにも比すべき憩ひの地布哇は全嶋あたる天然の温室の如く滴る緑、亂れ咲く南國の花、萬物凡てのびやかに、刺あるサボテンまで豊かに伸びて林をなして居る。如から挽ぎ取つたまゝを割つて食す、甘味

滴るパイナップルと、加州のメロンとは共に忘れられぬうまさであった。敷時間のドライブで、此港の見るべき處を一巡して船に歸れば、甲板と棧橋とで見送る人、送らるゝ人（布哇遠征中の立教選手團も乗込んで）の投げ合ふ五色のテープと、此地特有の花びらをつないだ花環花束水に浮いて、船はさながら花壇の中

蛙がな

確 氷 茂

四月も十日になつたが、まだ櫻は盛りにならない。今年も陽氣が非常に遅れてゐるのだといふ。さうかも知れない。もう大丈夫だと思つて薄い服にしたら風を引いたやうだ。しかも聲がズンズンと響いた。喋り度くないよ。喋つても他人の聲のやうな氣がして素晴しく心持ちが悪い。やつぱり俺の聲は、俺本來の聲が少くとも俺には相應しい。

省線電車の驛「下十條」で、朝の電車を待つてゐると蛙が鳴いた。確かに五匹位はゐるやうだ。

東京の雑沓街生活の中で蛙の聲を聞くといふことは郊外生活者を除いては非常に珍らしいことだ。僕などは郊外生活をしてゐるのだが、それでもついぞここ三年間ほど一度も蛙の聲を聞く機會を持たなかつた。だのに今朝は、その聲を聞いた。で、非常になつかしさを感じたわけだ。

僕は郷里にゐる頃から蛙の聲が好きだつた。水田で聲をばりあげて泣

に浮ぶと云ふ風情も、布哇ならでは見られぬ情景であらう。最後に此度の旅行で余の最も嬉しく思ふた事は横濱の岸壁で思がけずも千曲會本部の松村氏、蒲生氏、東京の原田氏、横濱支部長飯島氏を始め横濱千曲會員各位の御出迎へを受けた時である事を認め御禮をも合せて此茶話しの稿を結ぶ事にする(終り)

くその聲が好きだつた。殊にその聲を聞きながら、炬燵でうたたねをしてゐる氣分や、疲れた体を蒲團の上に伸ばしてゐる氣分を思ひ出すとたまらなくなる。

僕はいま幼い時代の郷の生活を妾を蛙の聲を通じて思ひ出してゐる。あの春の炬燵の中で、蛙の聲を聞きながら、自ら快い睡魔に襲はれてゐるその姿を。

櫻が咲くやうになると東京は人づぼくして始末だ。江戸つ子が浮かれ出す外、お上りさんも加つて東京は一層人づぼくなる。よくもこんなに人間が生きてゐたものと思はれる程だ。電車も自働車も、その他盛り場といふ盛り場は人で盛り上つてゐる。殊に田舎から出て来た人々が目につく。勿論これらお上りさんが目につくのは、彼等が東京見物に關する限りの團體を示す徽章を胸や帽子につけてゐる許りでなく、その姿を見れば一目瞭然だ。都の威壓に幾分

おびえてゐるその目、その口、その服装、その態度によつても明かである。

四月といふ月、それは僕にとつては限の廻る程忙しい月だつた。一日とても、一晩とてもゆつくりしてはゐられなかつた。公的にも、私的にも寸暇もない程忙しい月だつた。

それがため花の四月を殆んど知らずに通つて了つたやうなわけだ。かう忙しくては、物を考へて見る餘裕などは全くない。何だか頭がさんまんになつて了ふやうな氣がして仕方がない。

あれやこれやの仕事が一緒くたになつて寄せて來るのだが、それらを端から片づけるやうにしてはゐるものの、どうも手違ひを生じて致方がない。

今日(四月二十四日)は蠶絲會館の開館式だつた。モダンではあるが、何となくキャシャを思はせる建物が有樂町の空高く立てられた。何れにせよ蠶絲業關係の建物らしい建物としては唯一のものだ(少くとも東京に於ては)。これからこの建物にお参りに來るものが嘸多いだらうと想像する。

春の暮れ方、それは僕の現在としては、非常に享樂したい時である。殊に郊外並びに田舎のそれが享樂したいのである。勿論僕は現在郊外に住んでゐるので、それを限りなく享樂する自由を許されてゐるのだが、種々の事情に妨げられて、それをなし得ない實情にある。花の咲いたこ

とや、草の葉の伸びてゐることは、勿論それを意識するにはしてゐるけれどもそれを、寛いで凝つと享樂してゐる餘裕を餘り持たない。

今年春のやつて來るのが遅かつた。櫻の花は十日も遅れてゐるといふことを聞いてゐる。だが、ここ二三日のうちに、遅れてゐた春が駆け足でやつて來たと見えて、急に暖かくなつた。今日(四月二十五日)などは開着でゐても暑い位だ。

日比谷の交叉點のところ、「美松」百貨店で産業組合關係の資料展覧會と即賣會とをやつてゐる。(四月廿五日より廿九日迄)絲斷(大日本生絲販賣組合聯合會)では絹の服装をした日本娘とアメリカ娘(?)とを陳列し

獨身解消

讚

N君 「博覽會に來て貰へなくて残念だつて!」冗談チャ無い博覽會ナンテものは女、子供の見るもので俺達の見るものチャ無いよ。誰が頼まれたつて行くものか!

その代り御令閨の顔はトテモ見度ひ。と、云つたとて誤解する必要は少しも無い。コンナのが眞實の友情だと俺は信じて居る。

ダカラ寫眞を送つて呉れ! 俺は昔から男の顔と女の顔が一緒に並んだのがトテも好きなんだ! コレは勿論お願ひチャ無いよ! 當然の權利に基く要求の心算だ。

た。どちらも絹すくめで觀客の注視の的になつてゐるといふ。

生絲相場は上つたり下つたりしてゐる。今日(四月二十五日)は八百圓にまではね上つた。この分で行つて呉れれば今年の蠶は餘り悲觀しなくもよささうだ。然しそこが相場だ。何と化けるか見當がつかない。困つたものさ。

人間の世の中はうるさい奴だ。非常にくるさい。仕方がないから知らぬ顔をして暮すことさ。一々文句を取り上げてゐたら生きてなんかなられるものぢやあるまい。

蕉

兎も角も君のやうに仕事に對し、學問に對し馬力の強い男が美しい内助者を獲た(?)ことは學界のためにも祝福すべきだと思ふ。

今夜はコノ君からの新婚通知と云ふ吉報を祝して女房と共に祝杯を擧げようと思ふ。

ナント! 而も差向ひぢやないんだぜ!

第一世、第二世の腕白が目白押しに並んで第三世の君が二、三日中にこの世に生を享けようと云ふ豪勢さに於てだ。

俺に新婚生活の心掛を教へて呉れつて云ふ榮譽ある要請に對しては要

するに

「たゞ譯もなくベタ／＼惚れあつて居れ」

と云ふを出でない。僕はこれで押し通して来たし、今後もそうしようと思ふ。

圓滿なる家庭は生活戦線に於ける唯一、至上の堡壘だと思ふし、家庭に波風あつては、人生の大事を行ふことの困難なる恰も時化に魚を釣るやうなものだと考へるから。

トコロで友の慶事を聞き折角かな氣持になりながら老人めいた、説教めいた事を書いて了つた事、否、書かされて了つた事は情無い。君も案外性の悪い要求をしたものだ。いくら早く女房子を持つた罪にしろこ

れは余り損な役廻りと云ふものだ。

新婚の夫婦の心掛けを説くなんてのは汽車や、自動車の尻を押しして見やうと云ふ馬鹿のする事だ。ドウセ男と女のことだ。その上世にも選まれた新郎と新婦のことだ！心配してやるなんて愚の骨頂に決つて居る。

マー大いに期かに、愉快に、そして勝手にその興へられた惠まれた時代の夢を見るが良い。

俺の方にした處で「海陸一〇〇〇哩を隔て、友の惚氣に酔ふ」なんてこんな愉快な事が度々あるものか大いにヤリ給へ！

春五月、杏花爛漫として南滿の地も花蓋の香に酔ふ心地だ。拜具

小關、山部兩兄訪問記

生 人 岳

服務規定を遵奉して土曜日正午に省を辭して歸郷の途に着く。俺の故郷は赤城の下都から二時間の汽車旅である。九州邊迄で毎年歸る人に較べたら樂な旅である筈だが、人間程圖々しい哺乳動物は無いそうで、俺は何時もの習言に従つて浦和邊に故郷を置く人を羨む。一圓六七錢が口惜しいのでは無い、話し相手の無い時故郷に歸らんがために二時間間の不生産的動作及時間並にそれに伴ふ意屈が嫌なのである。特に去年とある(特に名を秘す)美人と汽車旅をしてからと云ふもの、この感が深い。末梢神經が何時も不満である。

初めから豫定し無かつた事では無かつたが群馬の新村に着た時は、全身アフリカ性を帯びて来て、自分乍ら危険を感じたので、此所で下車して昭榮製絲に小關兄を訪ねる事にした。鐘紡と昭榮で町費の大半を出すかの様に見える所だから直ぐ知れた。驛に遊ぶで居た鼻汗垂しの小僧(君精石にはこう言ふんだ)でも立派にガイドしてくれた。來意を告げると直ぐ取次でくれた。東京時代とは打つて變つた労働服姿の小關君が元氣よく、實に潑刺と朗かに微笑を以つて迎へてくれた。俺は頭が好いから直ぐある事を想像した。君よ知る愛の働を。

「どうだい……これは私である。うん、元氣が出た、身体具合も所を見せませう」

好い

「そりやそうだらふ、顔色が好くなつたよ」

「田舎は好いぜ、静で元氣が出たり、具体の具合が好くなつたり、又顔色の好くなつたのは、舎田のせい許りじやないだらう」

「うん、そりやそうだ、綜合的結果だ」

「はり合があるだらふ」

「何が」

「ばつくれるなよ、然し變るね、落着いたよ」

「そうかな」

「第三者が見れば直ぐ判る。家は近かくかい」

「直ぐ工場の裏だよ」

と言つて小關君はこちらの方向をちらりと見た。常時の眼付ではない

「下宿生活とどうだい」と言ふ

「おう段違だよ、下宿生活なんて問題にはならん」

と、二月前まで自分でも六疊の薄暗い部屋でモグラの様な生活をしたので忘れて居る。俺は大いにやつつけ様と思つたけれど今となつては倒底勝負が無いので止めた。二人で馬鹿話をやつて居る所現業長が入つて來た。紹介されて席に付くと

「東京の景氣はどうです」と言ふ、何所へ行つても聞かれる事である。然し又世の中に之程取止めが無い事も無いから俺は何時も苦笑するのみである。小關君はこの現業長の補佐役である。

「今夜はゆつくり小關さん所で御馳走を見せませう」

と、既に當てられた一人であるらしい。小關君の方を見てほ／＼えんで居る。先程まで彼方を見て居た人まで改めて振り返つて小關君を見た。

小關君は目下工場の興味の中心であるらしい。私は小關君の方へ向き直つて

「大丈夫かい」と、念を押したら

「大丈夫だ」と言ふ。多少の危険性はあるらしいが、一通は道具も揃つたらしい。私は反つて恨まれたりしない中に、又眼を保護する意味に於て辭退仕様とも思つたが、それでは兄に對して禮を欠くし、自分の後々の参考のためにもと思つて戦場に臨むの覺悟で御邪礙する事にした。

工場が終るのを待つて一町を離れない新家庭に案内された。五間程ある廣い新家で俺の下宿乃至兄の居た下宿に載べると雲泥の差である。

女關には國から送られて來たとか荷物が解れず其儘置かれて在つた。それ丈でも新家庭の香が俺の鼻頭をかすめた。氣を大きく持つて中に入行く様な氣だつた。それでも座敷へ通されて座つた時は大部落着くと云ふより學生氣分になつて奥さんの出で來るのを今か今かと待つ様になつた。とにかく紹介されて夕食を共にした。獨り者は哀れな者だ。給仕される度に手が細くゆれる。何か言ひ度くなつたので

「飯がよく焚けて居ますなア」と言ふと、小關君が受繼いでしまつて

「いざとなれば結構焚けるものだよとあつさり五〇されてしまつた。喰ひつぱらひして居る中に小關君が

「めんどうだからお前も一緒に喰べたらどうだい」と言ふ。

奥さんは何とも返事しない俺は遠慮して居るんだと思つた。然しこの俺の考へは新家庭にとつて認識不足であつたらしい。やゝ暫くして小關君が白状する様に言つた。

「あつそうだ、茶碗が無かつたんだ小關君は丁度其日に夜業を持つて居たので、俺は食ひ終つたら直ぐ退却仕様と思つて居た。が喰終つた時が案外早かつたので暫く話した。

「山部君度々來るか」

「うん、來るよ、註文すると自轉車で持つて來てくれる」

「自轉車で？」

「おう汽車に乗つたんでは算盤が採れないらしい」

「相變らず多額納稅者かい」

「なんだい多額納稅者とは？」

「一升四〇錢の口さ」

「うん酒か、相變らずだ。何時も飲むこと許り考へて居る」

「腕が上つたらふな」

「奴に言わせる」と商賈上不得止と言つて居る

と言つてお得意のソプラノで笑ふ。

山部君はその學生時代に於てすら敢て卒中を怖れずと言つて飲むのだから今や練磨された今日相當のものであると考へた。丁度七時六分の汽車に都合の好い時間になつたので失禮する事にした。

「博覽會が始つて居るから來ないかい」と言つたら

「頼まれたつて君の下宿へなんか行くものか」と頭からやられた。俺も來られては

「どうだい……これは私である。うん、元氣が出た、身体具合も所を見せませう」

困る。俺は一間切り持たない天下の
獨身者なのである。小關君は出かけ
た

「今夜二人客が来るぞ
と奥さんに言つて居た。紹介に多忙
であるらしい。俺も感情の動物であ
る以上、ある種の寂寥と憎悪を持つ
たけれど、俺も近い内と思ふと自
分の將來に希望が湧いて来て、
小關君の家庭に永久の榮隆あらんこ
とを心中から祈つた。

七時六分の下り上州高崎に向
ふ。俺の家は此所から約四〇分の行
程である。高崎には山部君が居る。
もう此所まで来れば、と思つて汽車
を捨て、市内電車で赤坂町に向ふ。
車掌に教へられて電車を捨て、暗い
小路を行くと向ふから渡世人風の男
がやつて来た。段々近寄つて見ると
今様安兵衛の當の山部君である。「お
い！」と呼びかけたら始めは判らぬ
様だつたが「やア瀧澤君か」と例の
氣合のある聲で應じた。次に
「君は眼がきくなア」
と来た。二度、三度の眼と「one
point two. の眼の區別を判然と感じ
たのは此時が初めてだ。山部君は先
輩坂路氏の經營する坂路商店に居
る。早速店へ案内され、應接室へ通
されて主人の坂路氏及先輩入斗米氏
に紹介される。番頭を置くには惜し
い様な應接室である。雑誌の中にこ
の主従は何れも腕まきの貴族院議
員である事が判つた。三〇分許りの
後山部君と前橋まで同行する事にし
て坂路氏に別れを告げた。俺は山部
氏に飲む事に付ては一言も言はな
かつたけれど不言不語の中に兩者の意
見は一致してしまつて飲む事を可決
してしまつた。山部氏行きつけらし

いおでんやへ行く。
「大部腕が上つたらしいな
と言ふと
「それでもねえが自信が出て来た
と言ふ。倍増の言ひ方である。「時間
が無えから急ピツチでヤラウ」と云
ふので、二、三本あける。以前山部
君は飲むと青色乃至青紫色を呈した
ものだが、此頃では血管が慣れてア
ルコールを通すらしい。四、五本目
に幾らか淡赤色になつて来た。
「商賣はどうだ
と言ふと
「樂じやねえ
と言ふ。それでも坂路氏が判つて居
るから好いさうだ。煮蘭機を去年か
らでは六台とか賣込むたとか。賣込
む度に客に飲ませるので腕が上るん
ださうだ。俺も山部君もヤラウ會の
會員だつたので、ヤラウ會員へ手紙
を出す事にした。手先の狂わない中
にも早速お上に端葉を貰つて書く。
山崎、大木、滋野、林四氏に出す。黒木
氏にも出さうと思つたが住所が頭に浮
ばなかつたので失禮してしまつた。
「何故正月のヤラウ會に俺を呼ばな
かつたのだと、恨めしげである。
「商賣人は勤人とは違ふから遠慮し
たのさ、それに話が急だつたから
と言ふと
「電話をかけりや直ぐ行くのに
と山部君、ヤラウ會の戸倉に於ける
状況を知らないんだから無理は無
い。
醉が廻つて来ると背廣を着て居る
事なんか忘れてしまふ。次の瞬間に
懐かしい學生時代の氣分である。
「君のあの話は有名だぜ
「何の話だ
「電信柱に説教した一件さ

「うんあれか、あれじや參つた
「黒木君大部憤慨して居た
「俺は突きとばしてから一寸見たら
黒木君なので酔つた振りして面を
見せない様にして居た
「案内する方の黒木君も大部酔つて
居たらしいな
「奴だつてふらふらして居たよ
「何んでも黒木君が歸らうと思つて
彼所まで来ると、知らねえ人が苦
拜啓

陽春の候愈々御多祥奉賀候
陳者今回在外研究員を命せら
れ来る十八日神戸港解纜鹿島
丸にて渡歐可仕候茲に故國を
去るに際し謹而諸彦の御健勝
を祈上候尙在外中は兎角御無
沙汰勝と相成るやも計られず
候間其の點御寛容被下度候右
御挨拶申上候 敬具
昭和八年五月十五日
古谷 榮 藏

上田蠶絲専門學校
千曲會々員各位
し氣に電信柱に寄り掛つて居るの
で家へ送つてやらうと思つて「何
所か悪いのですか」と肩へ手をか
けたら「何するんだい」とか言つ
て突飛ばされたさうだ。翌日學校
でひでえ奴もあるもんだと言つて
居た。
「俺はあれ以來電柱に御説教した事
は無え
「それ程酔つた事が無えと云ふのか
「いや酔わなくなつたんだ
「ポストの方はどうだい

と言ふと、唯
「わは、
と笑つて居る。これはバネである山
部君はポストに突當つて詫言た事が
ある。ポストも苦笑した事だら
ふ。
「君とは一年振りだなア
と言ふ。實際山部君とは丁度去年の
今頃別れたのである。滋野と三人で
惜別會をすゞらんでやつて山部君と
夜の一時に上田の停車場で別れた
切りである。
「君が卒業したので一軒酒屋が潰れ
た相だ
と言ふと
「まさかそれ程でもあるめえ
と、飲み歩いた上田の街が懐しい様
である。
「三年居れば忘れられねえ土地にな
るよ
と俺も一年前二年前と夢を追つた。
九本目が終つた頃の前橋行きの一
時が近くなつたので切り上げる。高
崎はもう静かにねむつて居た。山部
君と別れたのは翌日の一〇時であつ
た。(一九三三・三・三三)

鹿兒嶋便り

萍蓬生

五月の旋律、鯉が、鯉鯉が、眞鯉が、
新緑初夏の空に泳いでゐる。正に初夏は
男性のシンボルだ。春から夏にかけてこ
の南國の潤葉樹は若葉に萌えると同時に
ハラ／＼と音も無く去りし年の葉を落
す。眼に軟い光を投げる若葉と古葉のハ
ラ／＼と散るコントラストはこゝでなく
ば見られない事象ではある。かういふ有
様を作文にして東京へでも出せば偏見的
認識を以て一笑に附せられるであらう。

一方的社會認識論を以て小生の記述に
依る本縣動向の結論に對して認識不足と
は考へてゐない従つて小生の記述が誤謬
でない以上は敢て訂正を認めない。小生
と雖も對現代社會觀に對する認識の把握
はしてゐる。而して斷じて一方的のもの
ではないと自信して居る。然し認識の把
握を以て十分とは考へない。現代社會に
適合せる善處を必要とする。
本縣の農民の大部分が自作農であり已
れの所有地で生産せられたるものは凡て
己れの収入となる點に於ては確かに大な
る強味でなければならぬ。詳しくいへば
本縣全農業者の八割五分が自作農及自
作兼小作である。何故斯様に多いかと云
へば封建時代の門割制度に起因するもの
である。門割制度とは簡単に云へば各土
地を適當に分割して貸與若しくは所有せ
しめた制度で一定限度以上の土地を占有
することを許さなかつた。而して凡ての
農民は土地の上に所有權なく佃作明治維
新に際して門割地の上に所有權を認めら
れたものである。従つて大地主の無い代
りに農民の大部分は自給自足の出來得る
程度の土地を有するものである。加之門
割制度は隣保相助の精神を培養し一般に
團結力強く各種共同事業が他縣に比し迅
速なる發達を爲し蠶絲業に於ても種蠶共
同飼育の施設蠶繭組合の設置製絲業共同
施設の公正取引が出來る様になつてゐる。
農産物は主要農産物米麥の外に大豆、
粟、蕎麥、甘藷の作付反別は全國でも加
指の中に加之工蠶作物の菜種、甘蔗、
煙草、茶の栽培も亦同様である。農業の
傍ら畜養業、養蜂、養蠶も全國五指の中
に算へられる。氣候極めて温暖にして一
年中勞働し得るといふことも確かに大い
なる強味の一つだ。而して農家一般の生
活は全國中最も低く極めて粗食に耐え
得る等現下經濟恐慌に對抗し得る素質を
十分に持つてゐる。吾等は再び聲を大き
くして「すぐにくたばる様な人間は一人

も「おわはん」と叫ばざるを得ない。併し耕地單位面積當りの農産物は至つて少量にして粗放の嫌がないでもないが之等は農業助成の諸施設と相俟つて近き將來には面目を一新することと思ふ。

五月の空は爽かだ夏服にならなければならぬ位汗が出る程がもう市場に出た。櫻島には間もなく枇杷が吾等を招く、この枇杷の味は東京の千原屋で味ふ比ではないと聞く夏は味覺から一不景氣な顔をしてゐないで味覺の鹿兒島へ来るさ。

淺雲錄

曲千生

一、入學試験の

いんげん

入學試験の志願者数の多寡で其の學校の威力を顯はす尺度と心得て居るものがある、いや世間一般に其の方が多いかも知れない、又事實其の例も澤山ある、早い話が高等學校で其の志願者数を一瞥すれば蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあるであらふ。だが然し必ずしも此の全部を無條件で認容するはあたらない、殆ど各學校の總てが志願者の掻き集めに狂奔して居ることも周知の事實である。抑此所に商業的な不適當な言葉かも知れないが「罪惡が胎胎して来る、現代的に修飾したプロパガンダもせなければならぬ」だらふし又多少のトリック(?)も弄さなければならぬかも知れない。

此の志願者の多寡即實力の消長と云ふ世間的な觀點を排撃すべき材料はいくらもあるがよその樂屋覗きが主眼でないからそろ／＼母校の志願者数の検討に移らふ。

抑々母校は明治四十四年第一回の志願者を募集して以來本年度で正に第二十三回目に當るのである。其の間志願者数の起伏盛衰の跡を辿つて見ると却々に面白い

因果律が見出される。

先づ開校から大正九年迄は大體漸次遞減の足取りを經、十年には底を入れて百八名と云ふ採用人員にすれぬ数字を示し十一年からは緩かではあるが堅實な上向の姿勢を取り昭和六年から俄然數を増し本年度でマキシマムに達して居る、此の規則的なカーブは奇妙なことに吾々が所謂景氣と云ふ言葉とは逆行して明に負のコレレションを示して居る。

惟ふに此の關係は獨り母校ばかりで無く技術を専門としたところの學校でも同じ傾向を指して居るかも知れない、大正七八年の好景氣時代は學校の世界では法科萬能時代で猶も構子もみな法科をめざしたものである、入學の見込みなどは問題でなしに高商、外語、法科等を口にした中學生は學生にして學生に非ざるものであつた、かゝる流行病的風潮が驅つて吾々から入學志願者の數をかなりに掠奪したものである、不況時代の今日に對照し往時を回顧すればまことに今昔の感に堪えないものがある、之もみな時代の反映で榮枯の常、免れ難い自然のリズムで仕方もあるまい。

紡績科が増設されたのは大正八年であるが其のために特に志願者が増加したとは認め難い、極端に多くなつたのは昭和六年以來本年度の三ヶ年で恰も昭和六年は試験科目が英語數學の二科目に限定された年であるから此の二者の間に何等かの關係が産み出されたものと想像が付き。科目が二科目減つたために志願者が殖えたとすれば随分なさけない話である、學校プロパーが目的なのかこの學校へでもなんでもかんでもは入れさへすればそれで良いのか一向に判断がつかない、然し一般受験ボーイの間にはかなりこうした空氣が擴がつて居ることも事實らしい、其所で大量の志願者必ずしも好漢を産むとは定らないと云ふ議論も成り立つわけである公式的には勿論志願者の多い程秀才を獲るわけではあるが。

二科目に限定したために一方に於ては如斯く多數の志願者を得たが其の反面に於て實業學校出の秀才をシャットアウトした結果になつて了つた、昭和六年以降實業學校出の受験者にして合格圏内に入るものは絶無に近い状態である、英數は實業學校には最も不得手の科目かも知れないがそれにしてもいさしはどうかならぬものか、之は無試験入學者の英數に對する智識の程度を見て充分首肯し得られる、實業學校の教師にして無試験入學を母校に送らんとするものは其の學校の名譽のためにと英數を特別に勉強させる必要を痛感する、兎に角試験に依る實業學校出は閉塞された形であるが昭和三年から無試験入學の制度が出来て所謂學校秀才が此の方面から入れることになつた、だが試験科目の改正によつて受験者にもつと實業學校出を抱容する必要がある、當局も其の方面の研究を進めて居る。

本年度に特に多いと云ふ理由も種々に考へらるゝ不景氣のために附近の者が多く集つたと云ふことが其の一、近來の學生は各學校に澤山の願書を出す云ふこととが其の二、就職率が良いと云ふ定評を市場(?)に獲得したと云ふことが其の三、就中其の三は學校の最も有力な宣傳力を有つて居ることは確かである、最近ある識者が蠶絲關係の學校を士官學校海軍兵學校の次に於いて就職高率保持者番付を作つて置いたが成程軍人の學校には確に卒はあるまいが吾々學校にしてはいささか機たい話である、然し俸給や地位の如何を問はずの意味其の儘の就職率から云ふと識者の名言決つて荒唐無稽ではない、こゝろみに商科法科方面の夫れと對照して見ると大いに意を強うするに足るものがある。

要するに本年度は志願者も多かつたが就職率もよかつた、先輩各位の血路は社會に入學する新卒業生の就職を高率にすると同時に入學志願者の昂騰をも招くもの

年次	回数	數
明治四十四年	一回	四〇一
同 四十五年	二回	二七八
同 四十六年	九回	二二二
大正 八年		
同 十年	十一回	二〇八
同 十二年	十三回	二二三
同 十五年	十六回	二三五
昭和 三年	十八回	二五七
同 五年	二十回	三三一
同 六年	二十一回	五〇五
同 七年	二十二回	四一三
同 八年	二十三回	五六四

(英數の二科目となる)
(無試験入學開始)
(紡績科設置)

補缺入學許可

- 養蠶科 (順序不同)
- 山梨 久保田不二夫 新潟 山内一次
 - 長野 小野 忠 東京 山村泰三
 - 長野 清水 傳 長野 坂本勝三
 - 同 横澤 正雄
 - 製絲科
 - 廣島 赤尾文顯 群馬 小菅貞三
 - 佐賀 東島藤次郎
 - 絹絲紡績科
 - 愛知 久芳大三 長野 土屋 勉
 - 大阪 菅尾 源治

選科入學許可

- 養蠶科
- 群馬 福島善二郎 長野 岡宮辰夫
 - 長野 岡島龜治 埼玉 松本 武
 - 製絲科
 - 長野 清水健一 長野 小口正晴
 - 愛媛 田中 實
 - 絹絲紡績科
 - 群馬 小野啓助

製絲教養養成科 入學許可者氏名

- (五十番順)
- 長野 白井和子 同 井上すい
 - 同 萩原正次 同 上條 理
 - 奈良 喜多美千代 長野 清水藤江
 - 長野 春原さと 同 關 あき子
 - 同 西原 藤 同 深町いつ
 - 同 藤田志保子 同 宮城久子
 - 同 山崎みつ子 同 若林のち子
 - 同 和田さん

住所移動

- 大名 昇 蠶一 福島縣蠶業振興所 福島支所(福島市)
- 田附卯一郎 同 會津農林學校(福島縣坂下町)
- 箕輪貞三 選蠶一 上田市
- 廣瀬清四郎 蠶二 茨城縣眞壁郡鳥羽村
- 東保末
- 矢島 剛 同 長野縣小縣郡縣村
- 峯村眞一郎 蠶三 鉾淵紡績株式會社 松本製絲工場原料部(松本市)
- 佐藤國一 選蠶四 東京市杉並區高圓寺一丁目二十二番地
- 田附由治郎 蠶五 矢島製絲株式會社 原料部(甲府市太田町)
- 原利部 蠶六 鉾淵紡績株式會社 千葉支店(千葉市橋町一八六〇)
- 中島文雄 蠶九 徳託郡農會(龍本縣) 四方定雄 同 田川郡農會(福岡縣伊田町)
- 伊田町
- 母袋良平 蠶十 小縣蠶種同業組合 (上田市)
- 奥野憲三 蠶十一 中洲實業補習學校 (長野縣諏訪郡)
- 清内衛敏 同 滿洲國哈爾濱新市 街花園街二一
- 安部 和 蠶十三 福島縣立蠶業學校 (福島市外渡利村)

- 矢野昌雄 同 久下農商公民學校
- (兵庫縣米上郡)
- 片山次夫 蠶十五 岩國蠶種株式會社
- (山口縣岩國町)
- 小山惠治 同 小縣蠶業學校(上田市)
- 櫻井弘吉 蠶十五 下高井農林學校
- (長野縣下高井郡穗高村)
- 小林貫一 台灣總督府中央研究所農業部應用動物科(台北市富田町)
- 須藤清吉郎 蠶十六 麻績實科中等學校
- (長野縣東筑摩郡麻績村)
- 北澤孝一 蠶十六 片倉製絲紡績株式會社研究所(埼玉縣大宮町)
- 關辰雄 蠶十七 上田蠶種株式會社(上田市)
- 興變 同 京畿道產業部農務課(朝鮮京畿道)
- 佐藤 馨 同 高野蠶種製造所(愛知縣刈谷町)
- 一之瀬貞嗣 蠶十八 長野縣小縣郡長村四四四
- 水野敏男 同 中倉製絲紡績株式會社福島蠶種製造所(福島市五十字塚間五)
- 竹内直人 同 保險責任山本村信用販賣購買利用組合(長野縣下伊那郡山本村)
- 古川正喜 同 長野蠶業取締所
- 飯山支所(飯山町)
- 坂口正信 同 鐘淵紡績株式會社
- 千葉茨城支部(千葉市橫町一八六〇)
- 河田榮一 同 國立蠶業試驗場松本出張所(松本市)
- 齋藤軍二 蠶十九 東白川農蠶學校(福島縣)
- 上原安夫 埼玉蠶業取締所
- 松山支所(松山町)
- 辻本 勇 同 三重蠶業取締所
- 久居支所(久居町)
- 工藤實司 同 尾代高等女學校
- (長野縣屋代町)
- 鷹本齋一郎 同 愛媛縣蠶業取締所(松山市)
- 竹内博男 蠶十九 長野縣小縣郡神川村
- 勸使河原董之助 同 舊姓福地町野 巖 同 多氣實業學校(三重縣相可町)
- 桐生義文 蠶十九 青竹館蠶種部(新潟縣北蒲原郡聖龍村)
- 赤池勝男 蠶二十 長野縣殖科郡南條村
- 新井貞雄 同 昭榮製絲株式會社(東京市日本橋區吳服橋三丁目東京建物ビル五階)
- 駒井慶治 同 同右
- 有我彰夫 同 日東製絲株式會社蠶種部(兵庫縣竹田町)
- 濱井成一 同 長野蠶業試驗場
- 飯田支場(下伊那郡那那村)
- 福地 進 同 本校蠶種科
- 市川信一 同 農林省蠶業試驗場
- 松本出張所(松本市)
- 北澤延榮 同 石川縣蠶業取締所(金澤市)
- 清藤三郎 同 和歌山縣立紀北農業學校(那賀郡岩田町)
- 小林 修 同 青森縣蠶業課蠶業取締所(青森市)
- 倉元隆太 同 那是製絲株式會社蠶種部(京都府綾部町)
- 町田史郎 同 富山蠶業取締所
- 井波支所(井波町)
- 宮川千三郎 同 農林省蠶業試驗場(東京市杉並區高圓寺)
- 宮入 保 同 農林省蠶業試驗場前橋桑園(前橋市)
- 森川 博 同 熊本蠶業取締所
- 八代支所(八代郡太田町)
- 杉浦卓三 同 片倉普及團(松本市蠶玉町)
- 山口恒夫 同 同右
- 香山 登 蠶二十 同右
- 中島 眞 蠶二十 上高井那農洲村相
- 之島
- 仁尾幾朗 同 水原農事試驗場蠶絲部(朝鮮京畿道水原)
- 村山長義 同 鹿兒島縣出水郡阿久根町
- 齊藤 章 同 昭和產蠶株式會社
- 大隅支店桃木養蠶場(鹿兒島縣肝屬郡鹿屋町)
- 竹ノ内可止 同 奈良縣蠶絲課
- 寺島一乃太郎 同 長野縣福島町
- 遠山正人 同 丸子製絲株式會社
- (長野縣丸子町)
- 都 冥華 同 朝鮮原蠶種製造所(朝鮮京城府東大門外)
- 角田 收 同 本校蠶種科
- 都築 清治 同 鐘淵紡績株式會社營業部蠶業課(神戸市市田區御崎町一)
- 渡邊正男 同 日東製絲和田山工場(兵庫縣和田山町)
- 吉田太郎 同 長野縣南安曇郡有明村)
- 清水 洸 同 本校蠶絲化學教室
- 原 治夫 蠶二十 上田市新藤町針塚長太郎方
- 山崎勝巳 蠶二十 長野蠶業試驗場(長野市)
- 矢野宗彦 同 大分縣下毛郡深耶馬溪村
- 顯富正廣 同 鐘淵大隅支店志布志養蠶所(鹿兒島縣志布志町)
- 林部源三郎 同 帝國人造絹絲株式會社岩國工場(山口縣麻里布町)
- 遠藤文平 同 紀南製絲所(和歌山縣御坊町外湯川村)
- 佐々木榮二 同 靜岡縣濱名郡飯田村
- 渡瀬一五六
- 山岸松次 同 有限責任旭組婦生絲販賣購買利用組合(富山縣八尾町)
- 加美好男 同 自宅上田市鹿裏町
- 現住所兵庫縣西宮市外夙川甲南莊
- 大野久次郎 同 舊名久藏
- 手塚兵治 蠶十 東京市大森區坂方町六九五
- 合田信一 蠶十一 片倉製絲紡績株式會社鳥栖製絲所(佐賀縣鳥栖町)
- 猿渡兼光 蠶十二 鐘淵紡績株式會社
- 福知山工場(京都府福知山町)
- 福島鋼冶郎 同 農林省經濟更生部
- 多勢義三 蠶十三 多勢丸多製絲長岡工場(福島縣伊達郡長岡村)
- 北村孝治郎 蠶十四 兵庫縣楠檢定所柏原支所(柏原町)
- 吉井 鼎 蠶十六 那是製絲株式會社
- 工務課(京都府綾部町)
- 林 龜一 蠶十九 片倉製絲紡績株式會社愛知製絲所(宮市)
- 井上壯平 同 片倉製絲紡績株式會社松江製絲所(松江外津田村)
- 林 清一 同 九州帝國大學農學部專攻生福岡市箱崎町)
- 富原秀人 同 片倉製絲紡績株式會社鳥栖工場(佐賀縣鳥栖町)
- 加來芳文 蠶十九 熊本市二本木町二〇四
- 石井清六 蠶二十 鐘淵紡績株式會社新町製絲場(群馬縣新町)
- 井田英夫 同 本校蠶絲化學教室
- 六川忠行 同 岩手縣是製絲株式會社(盛岡市)
- 奏 彰 同 橫濱生絲檢査所(橫濱市中區北仲通八)
- 萩原行雄 同 片倉製絲紡績株式會社仙台製絲所(仙台市東八番町)
- 川村五郎 同 鐘淵紡績株式會社製絲研究所(神戸市市田區御崎町)
- 依田 實 同 會陽製絲株式會社
- 二本松工場(福島縣二本松町)
- 米澤保正 同 九州帝國大學農學部專攻生(福岡市箱崎町)
- 竹内正司 同 愛媛製絲株式會社
- (愛媛縣越智郡富田村)
- 角田勝郎 同 新興毛織株式會社
- 今津工場(西宮市外今津町)
- 坪根 克彦 同 日本生絲株式會社(橫濱市本町)
- 室岡茂克 同 農林省蠶絲局繭絲課(東京市麹町區大手町)
- 國崎忠尚 同 神戸生絲檢査所(神戸市濱邊通)
- 久島文男 同 合資會社渡邊製絲所(埼玉縣大宮町)
- 山本金之助 同 片倉製絲紡績株式會社紀南製絲所(和歌山縣日高郡湯川村小松原)
- 收 道男 同 全國製絲業組合聯合會(東京市麹町區丸ノ内三ノ一帝國農會內)
- 松崎昇平 同 片倉製絲株式會社(福島縣平町)
- 松村惠一 蠶二十 那是製絲株式會社本工場(京都府綾部町)
- 丸山 勳 同 昭榮製絲株式會社
- 本社(東京市日本橋區吳服橋三丁目七東京建物ビル五階)
- 藤森明美 同 三重縣繭檢定所(津市)
- 小林 進 同 那是製絲株式會社
- 本社(京都府綾部町)
- 後明武雄 同 増源商店(長野縣諏訪郡平野村岡谷)
- 喜多尾裕門 同 片倉武井製絲所(長野縣上伊那郡那那村)
- 三宅 勳 同 鐘淵紡績株式會社
- 甲府製絲所(甲府市)
- 宮下文四郎 同 片倉製絲紡績株式會社松本製絲所(松本市)
- 志賀 覺 同 昭榮製絲株式會社
- 本社(東京市日本橋區吳服橋三丁目七東京建物ビル五階)
- 篠原林助 同 大日本生絲販賣組合聯合會(橫濱市中區北仲通)
- 白井美明 同 長野縣小縣郡長瀬村
- 平野正夫 同 關西製絲株式會社(本社)(津市)

